

人口減少時代に突入して

労働者委員 榮留 道夫

1月12日、鹿児島市民文化ホールでも「新成人のつどい」が開催され、多くの若者が晴れて二十歳を迎えられました。本当におめでたいことでもあります。今年、1993年度（平成5年度）に生まれた方で、世間はバブルが崩壊した後、厳しい雇用情勢であり、学生就職も「氷河期」と言われて厳しい時代でありました。今年、鹿児島市で約6千人、鹿児島県で約1万5千人、全国で約122万人が成人式を迎え、ピーク時、1970年度（昭和45年）の約246万人の半数に満たない状況でありました。

また、出生数は、2013年（平成25年）約103万人、死亡数は約127万人となり、人口減少に突入しています。この数字を単純に当てはめれば、20年後の新成人の数は今よりも約20万人も少ない数字になります。

今、まさに超少子化時代になりました。また、子供を生んでも経済的に育てられない親、子供を置き去りにする親、虐待する親が増えていることも事実であります。

「子どもは社会の宝である」とよく言われます。特に徳之島3町（伊仙・天城・徳之島）は、合計特殊出生率がいずれも2.1人を超え、全国のトップ3の市町村であり、「長寿・子宝宣言」をしている伊仙町に至っては、2.42人となっています。

徳之島には、「子どもは恵まれるだけなるべく多く生んだほうがいい（子やたぼらゆんしこ）」という諺があり、多く生まれる子供を、その家族だけではなく周囲の親戚、友人、地域の人々が分け隔てなく面倒を見て大切に育てる文化があります。

この徳之島の現状を見たときに、これからの日本の経済や社会を考えるうえでのヒントが隠されているような気がします。徳之島の人口は、3町合計で約2万6千人（2010年）であり、この15年間で約25%も減少しています。

国立社会保障・人口問題研究所の推計によれば、2010年（平成22年）の国勢調査では日本の人口は、1億2千8百万人であったが、2048年（平成60年）には、約1億人と約40年間で2%の減少になると推計されています。

徳之島では、高齢化が進んでおり、老年人口比率は約30%であり、人口推計による日本の老年人口比率は2025年（平成37年）で同比率であり、人口でいえば35年後、高齢者でいえば10年後の日本の高齢社会を先に到達しているところでもあります。

前述のとおり、徳之島3町が出生率のトップ3であり、伊仙町の出生率は、最下位の東京都目黒区（0.74人）の3倍以上であり、日本の出生率が徳之島並みに上昇すれば、人口減少から増加に転じ、日本の少子化問題は一挙に解決します。

日本では、一般的に離島地域の出生率が高く、上位30市町村のうち、25市町村が離島であります。これは、前述したように地域の子育てをする文化があるということだと思います。現代社会の中で、離島並みの環境があるかというとなかなか難しいのが現実ではありますが、「子どもは社会の宝である」ということを、もう一度私たちが再認識し、社会全体で子育てをする支援体制をすることが必要であると思います。

日本の将来を考え、徳之島に学び、日本が今後取り組むべき少子化対策の先進的な事例として手本にすべきと考えるのは私だけでしょうか。